

中国の歴史教科書に見る三国時代

— 一九九〇年代を中心に —

田 中 靖 彦

Three Kingdoms Appeared in the Chinese History Textbook Mainly about the 1990s

Yasuhiko Tanaka

Abstract

This paper mainly discusses the Three Kingdoms appearing in the Chinese textbooks of history for junior highschool students in the 1990s. For example, the valuation of Cao Cao 曹操 in the textbooks had been strongly under the influence of Mao Ze Dong's historical view. And the description about the relationship between Sun Wu 孫呉 and Yi Zhou 夷洲 has been reflecting the government of People's republic of China's opinion about Republic of China. Recently as the Chinese Communist Party has been changing the view of history, so some of descriptions about above-mentioned characters in the textbooks have been changing.

Keywords : Three Kingdoms, history textbook, history education

キーワード : 三国志, 歴史教科書, 歴史教育

はじめに

昨今の日中関係を語る上で、歴史認識問題が大きな柱であることは言うまでもないが、その中でもとくに注目を集めているのが、歴史教科書の記述である。ただし、こういった歴史教科書の記述に関する注目は、往々にして近現代、就中、日清戦争期以降のそれに集中する傾向にある。

筆者は昨年度、中国で使用されている教科書における歴史記述を輪読するゼミを行ったが（テキストには、後述する『歴史与社会』を用いた）、学生

たちからは、自分が高校までで使用してきた歴史教科書との違いや、自分が学んできた歴史との差異に対する驚きの声が、少なからず聞かれた。そして、日中間の歴史認識の差異は、必ずしも近現代のそれに限らず、それより昔の歴史についても存在することを実感したようである。また筆者としても、こちらにとってはよく知っている事象であっても、学生にとっては全く「常識」ではない、ということも数多く、いわゆる「歴史認識」の難しさを痛感することとなった。

そこで本論では、現在の二十～三十代が学んできたであろう、一九九〇年代の中華人民共和国で使用された歴史教科書を主な題材として、三国時代の記述について紹介¹⁾、その後の中国における教科書についても触れ、いささかの考察と検証を加えてみたい。日中ともに高い知名度と人気を誇る三国志を取り上げることで、歴史認識および歴史教育というテーマに対する興味や攷察を深める一助となれば幸甚である。

一．九二年版における三国時代

(一) 一九九二年版の歴史教科書について

中華人民共和国における義務教育で使用される教科書について、小島晋治・並木頼寿監訳《二〇〇一》巻末の「解説・あとがき」に従い、簡潔にまとめておく。最近までの中国では、ほぼ国定教科書に近いものが使用されていた。教科書は、国家教育委員会（当時。一九九八年以降は教育部）が定めた「教学大綱」にもとづき、北京人民教育出版社が作成し、全国で複製・配布されるという形式が採られていたのである。そして、本論で着目する歴史教科書（正確には、人民教育出版社歴史室編『九年義務教育三年制初級中学教科書 中国歴史』人民教育出版社、全四冊、一九九二年初版。本論では、一九九八年第五刷版を用いる）は、国家教育委員会の中小学校教材審定委員会の歴史学科審査委員会による審査を経て、一九九二年秋の新学期（中華人民共和国は秋学期が年度開始）より広く使用されるようになったという。うち、中国史を扱った歴史教科書は全四冊で、これを初級中学（日本でいう中学校）の一～二年で学習することとなっていた（三年次には世界史を学ぶ）。冊子としては薄いように見えるがその分量はかなり多く、一冊あたり約二〇〇頁前後、明石書店刊行の邦訳はなんと一二〇〇頁を超える大著となっている。本論ではこれを九二年版と呼称する。

後述するように、現在では教科書も複数種類が登場しているが、現在の中国の二十～三十代の人々は、この一種類しかない言わば準国定教科書によって歴史を学んできていること、また、この九二年版の使用された時期が、日中関係が徐々に良好さを欠いていった時期であることを考えると、現在の中国の人々の歴史意識を知るうえで、また当時の中国共産党の意向を見るうえで、この九二年版は大きな意義を持つ。

(二) 「三国鼎立」

続いて具体的な内容について見ていくが、その前に、九二年版の大きな特徴の一つに、必修部分とそうでない部分の別があることを述べておく。九二年版の冒頭には「一. 本書の本文は基本的な要求であり、学生が必ず身につけるべき内容である。(中略) 三. 本書の楷書字体部分・図と注釈は基本的な要求には属さない。ただし、各学校はその状況に基づき、学生に更に高いものを求めても良い」(九二年版、第一冊冒頭、人民教育出版社 歴史室「説明」)とある。先述のとおり、歴史教科書の分量は相当なものと言えるが、そのうち楷書体部分、いわば余力学習的な部分は、少なくない割合を占めている。そしてその内容は、学生に歴史への興味を持たせる為の配慮からか、いわゆる歴史エピソードのたぐいが多い。以下の引用でも、本文部分と楷書部分の別を明記しておく。

まず、三国時代の記述が主な内容を占める第二十二課のほぼ全文を引用する。段落冒頭の大文字アルファベットは、筆者によるものとし、そのアルファベットが示す範囲は空行までとする。また、丸括弧は筆者が補ったものである。

A (本文部分)

第22課 三国鼎立

西暦220年から589年にかけての三国・両晋・南北朝の時代は、わが国の封建国家の分裂と民族大融合の時期であった。曹操と諸葛亮は、我が国のだれもが知っている歴史上の人物である。彼らの小説や演劇の中のイメージは、時として歴史の真実と大きく異なっている。いったいこれらの歴史上の人物をどのように評価したらよいだらうか。本課は歴史的角度から述べることにする。三国の鼎立時期の魏・蜀・呉各国の経済発

展も、この課の中で説明する。

B (曹操の肖像画の解説) 曹操 (155-220)。字は孟徳、譙県の人、わが国古代の傑出した政治家である。

老驥は櫪に伏すとも、志は千里に在り。烈士暮年、壯心は已まず。――曹操

C (本文部分)

官渡の戦

黄巾起義以後、後漢王朝は有名無実となった。軍事大権を保有する州・郡の官吏は、この機に乗じて軍事力を拡大し、数多くの軍閥が割拠する状態が形成された。その中で、黄河の中・下流の袁紹と曹操の実力が最強であった。曹操は漢の献帝を脅迫して許に至り、「天子を挟みて諸侯に号令し」、政治上の優勢を占めた。彼は賢者を招き入れ、屯田を実行し、農耕を奨励し、勢力は日増しに強大になっていった。西暦200年、曹操は寡兵を以て袁紹の大軍と官渡で大いに戦い、曹操軍は無勢で多勢に勝ち、袁紹軍を大敗させ、北方統一の基礎を固めたのであった。

D (楷書部分)

曹操は、謀略と判断力に優れ、天下統一の大業を己の任とした、一人の傑出した政治家、軍事家そして詩人であった。彼はかつて三度にわたって求賢令を發布し、出自の高低を問わず、ただ「治国用兵の術」さえあれば仕官できるとした。

袁紹は現在の河北・山西と山東東部を占有し、兵多く糧食足り、曹操を軽視していた。彼の幕下の謀士許攸は、騎兵一部隊を派遣して許を襲撃するよう策を献じた。袁紹は非常に傲慢で、許攸の策を採用しなかった。許攸は袁紹は必ず敗れると予想し、曹操に投降した。三、四万の兵しか有していなかった曹操は、許攸が来たと聞くと、喜んで靴すら履くことを忘れ、駆け出して彼を迎えた。許攸は、袁紹の兵糧庫の烏巢を襲うよう建議した。曹操はその夜、5000騎の兵馬を率いて、乾いた柴を抱え、夜が明ける前に烏巢に到着し、袁紹のすべての兵糧を焼き払った。官渡の前線の袁紹軍10万人は、噂を聞き大いに乱れ、曹操は勝利に乗じ

追撃し、袁紹の大軍を殲滅した。袁紹は僅か800騎余りを伴い、狼狽しつつ河北へ逃走し、この失敗以来振るわなくなった。

考えてみよう 曹操は何故官渡の戦いで勝利を得ることができたのだろうか。

E (本文部分)

赤壁の戦いと三国の建立

曹操は袁紹を破って以後、いくつかの軍閥を次々に滅ぼし、おおむね北方を統一した。同じ頃、長江下流の江南一帯を占有していた孫権は、比較的強固な統治を確立していた。荊州地方の勢力に頼っていた劉備も、また不断に力を強大させていた。

F (楷書部分)

劉備は前漢皇族の子孫であると自称していたが、軍閥の混戦の中、勢力は弱く、四方を奔走し、他人に身を寄せていた。彼は諸葛亮が傑出した人材であることを聞くと、関羽・張飛の二将を連れ、厳しい寒さの中、隆中を連続して三回訪問した。諸葛亮は劉備の誠意に感動し、ようやく出てきて会見した。彼は劉備のために当時の形成を分析し、荊州・益州を根拠とし、孫権と連合し、共同して曹操と対抗することを建議した。劉備は大いに喜び、諸葛亮に出慮し助力することを請うた。これが有名な故事「三顧茅廬 (三顧の礼)」である。

G (本文部分)

曹操は黄河流域を制圧した後、自らの強大な勢力を頼みとして、天下統一へ乗り出すことを企図した。208年、彼は大軍を率いて南下し、孫権・劉備連合軍と赤壁で決戦した。孫権の大將周瑜は、曹操軍が水上戦に不慣れであるという弱点を利用し、連合軍を指揮し火攻めの計略を用い、曹操軍を大敗させた。これが歴史上有名な、少なきを以て多きに勝つ、赤壁の戦いである。

H (楷書部分)

曹操軍20万人余りは南下し、劉備は荊州から樊口への退却を余儀なく

された。彼は諸葛亮を派遣して孫権に会わせ、軍を連合し曹操に対抗するよう説かせた。孫権は大将周瑜を派遣し軍を率いさせて劉備と連合した。孫権・劉備連合軍は5万にも満たず、曹操軍と赤壁で相対した。曹操軍は水上戦に不慣れで、波風による船の転覆を抑えるため、鉄鎖を用いて軍艦を繋いだ。一夜のうちに東南の大風が起こり、周瑜は部将の黄蓋を派遣して曹操に降伏すると偽り、油を注いだ柴草を満載した10艘の戦船を、風の勢いに乗って真っ直ぐ曹操の陣営に走らせた。10艘の船は同時に燃え上がり、曹操軍の水上要塞に真っ直ぐ突っ込んでいった。たちまち、水上要塞は火の海と化した。烈火は岸上の曹操軍陣営にも延焼し、曹操軍は大混乱となった。孫権・劉備連合軍は勢いに乗じて猛攻をかけ、曹操軍の焼死・溺死する者は数知れずであった。曹操は残った部隊を率い、慌てふためきながら北方へと逃げ帰っていった。

I (本文部分)

赤壁の戦い以後、曹操はあえて再び軽々しく南下しようとはしなかった。孫権は長江の中下流での地位を強固なものとした。劉備は湖北・湖南の大部分の地区を占拠し、また四川を攻略した。220年、曹操は病死し、彼の息子曹丕は漢の献帝を廃し、自ら皇帝と称して、国号を魏、都を洛陽と定めた。翌年、劉備は成都で帝を称し、歴史上では蜀と呼ぶ。222年、孫権もまた王を称し、国号を呉、都を建業と定めた。ここに至って、三国鼎立という局面が形成されたのである。

J (本文部分)

曹魏による農耕の重視

赤壁の戦い以後、曹操は更に農業を重視し、引き続き屯田を大々的に実施し、淮河流域の水利が修復された。先進的な灌漑用の道具である翻車(足踏み式水車)は、この時代、発明家の馬鈞が製造したものである。数年の努力を経て、北方の生産は回復し発展した。

(図の説明) 数年の中、所在 粟を積み、倉廩 皆 満ちたり。——『三国志』

K (楷書部分)

馬鈞は先人の汲水工具である水車を改良し、軽くて精巧で操作の楽な翻車を作った。翻車は低地の水を高い坂へ引き上げ、灌漑に便利で、洪水に遭ったときには、排水に用いることもできた。翻車は急速に民間に普及し、農業生産の発展を促進した。当時の世界でも、一種の最先端の灌漑工具であった。

L (楷書部分)

曹操は農業の保護を重視した。北方統一過程の最中、彼は「行軍の最中麦を踏み荒らしてはならない、違反者は斬首する」と定めた。行軍の途中、曹操の乗っていた馬が驚いて、農作物を踏み荒らしてしまった。曹操は主簿に自らの罪を問うた。主簿は「あなたは軍の総帥です。刑を加えることはできません」と言うと曹操は「法を定めた者が自ら法に背いてしまったのだ。罪に問われずにいてどうして部下を統率できようか」と言い終わるや腰の剣を抜き、皆の前で自らの頭髪を一束切り落とし、彼も法の外に身を置いているのではないということを示したのであった。

M (本文部分)

諸葛亮の蜀の統治

蜀の国の丞相諸葛亮は、農耕の奨励を大変重視し、税を軽くし、農業を迅速に発展させた。中でも蜀の絹織物業は比較的発達し、多くの人々が養蚕・錦織りをした。蜀の錦は各地で名を馳せ、魏・呉で売りさばかれ、蜀政府の主要収入源の一つとなった。諸葛亮はまた、西南の少数民族との関係改善にも注意を払い、西南地区の開発を加速していった。

N (楷書部分)

諸葛亮が蜀の国を統治していた時期、水利の発展を重視した。彼は成都付近の都江堰に堰官を設置し、常時千人余りを派遣し堤防の維持にあたらせた。成都西北の「諸葛堤」も、諸葛亮が人を組織し修復したものである。

蜀の建国以後、益州地方の大地主・大官僚・地方豪族は人民から掠

奪をほしいままにし、専横を働いていた。諸葛亮は、令を下し彼らに打撃を与え、彼らの強い不満を引き起こした。諸葛亮に勧める者がおり、「我々は益州を占領したばかりです。恩徳を多く施すべきです」と言うと、諸葛亮は「賞罰を明らかにし、寛大と厳格を併用してこそ、政治ははじめて公明正大になるのだ」と言った。結果として、不法な官僚・豪族は厳しい打撃を蒙り、当地の有能な人々は重用され、蜀の国の情勢はたちどころに安定していった。

今 民は困しみ国は虚し、決敵の資、ただ錦を仰ぐのみ。——諸葛亮——

O (楷書部分)

西南地区の少数民族に対して、諸葛亮は部下が勝手に殺戮したり欺き辱めることを許さなかった。彼はかつて南中一帯で挙兵し反抗した少数民族をうち負かし、その首領孟獲を捕虜としたが、孟獲は服従しなかった。言い伝えでは、諸葛亮は孟獲を釈放し、捕らえては放つというを前後七回繰り返す、最後に孟獲は帰順の意を示したという。

P (図の説明) 諸葛亮 (181-234) は、字を孔明といい、琅邪陽都の人である。人々は彼を「臥龍」と称し、我が国古代の有名な政治家である。

(図の説明) 諸葛亮は少数民族人民に桑の栽培・養蚕・糸繰り・錦織りを奨励した。彼は自ら蜀錦の図案、紋様を少数民族に送り、更に錦織りの出来る兵士に技術を伝授したといわれている。西南の少数民族は蜀の錦を「諸葛錦」と呼んでいる。

Q (本文部分)

孫呉の江南開発

孫呉の江南地区は人口も多く物も豊かで、大勢の北方農民が戦乱を避け、江南に移り住み、進んだ農耕技術を持ち込んだ。彼らと江南の民は、共同して江南の経済を発展させた。青磁は呉国の特産であり、制作技術は既に変遷進歩していた。呉国の造船業も発達し、海上交通の発展を促進した。孫権は將軍の衛温に数万人からなる船団を率いさ

せ、夷洲（注：夷洲は、現在の台湾）に到達させ、台湾地区と内地の関係強化した。呉国と南洋の多くの国家の間には友好的な貿易の往来があった。ローマの商人もかつて海路を経て呉国に到達し、孫権のもてなしを受けた。

R（楷書部分）

秦漢の時代、江南の耕作方法はまだ遅れたものであった。呉国は、中原の牛二頭引きの犁耕法を普及させはじめ、食糧の恒常的な増産を促した。孫権は率先して自分の車の八頭の牛を農耕用の牛に改めた。呉国は大きな船を造ることができ、その船には六、七百人が乗ることが出来た。孫権が派遣した比較的小さな貿易船も、80頭の馬を載せることが出来た。上下五層で、華麗な彫刻装飾の施された船もあった。江南の人民は多く麻布の服を着ており、民間の主要な手工生産は麻織物業で、麻布の生産は三国で首位であった。絹織物業も次第に興ってきて、裕福な人は皆、綾錦の衣服を纏っており、文人も養蚕用の桑を詩を賦する題材として用いることを好んだ。

（三）曹操への全面賞賛

では、上述引用を読んでいこう。

Aに見える「封建国家」という言葉は、日本人、特に昨今の学生には聞き慣れているようで馴染みのない表現かもしれない。封建とは、中国史における天子が臣下に領土と住民を支配させ諸侯とする支配制度をいい、ヨーロッパのfeudalismの訳語としても用いられる。だが、現在の中国において封建の語が斯かる意味を持つことは少なく、共産党政権以前の（往々にして否定すべき）旧支配体制を指す言葉として用いられることが多い。かつての日本の史学界でも盛んであった時代区分論争であるが、中国共産党の掲げる時代区分は、歴史唯物論にもとづき、原始社会・奴隷社会・封建社会・資本主義社会を経て、ゴールが社会主義社会となっている。そしてこの区分を中国史にあてはめ、殷周は奴隷社会、春秋戦国時代に封建社会となり、これが清朝中期まで続き（ここまでが古代）、列強によって中国が脅威にさらされた時期から近代となっている（中世という区分は存在しない）。二十二課で三国両晋南北朝時代を「封建時代」と呼ぶのは、当時において封建制度が行われ

ていたという意味ではなく、(支配者である地主階級が人民から搾取していた暗黒の)旧時代、というほどのニュアンスがある。

かかる「封建国家」の分裂時期に登場した傑物として、曹操と諸葛亮の名が挙げられている。そして、彼らのイメージと実像の乖離が早くも指摘されているのが興味深い。教科書本文を読み進めると分かるが、これは主に曹操の人物像を念頭に置いたものである。周知のように、曹操は一昔前まで悪人の代表格といえるほど否定的なイメージが強かった。かかる人物像の普及には、明代以降ひろく読まれた歴史小説『三国志通俗演義』(以下『演義』)や、京劇の影響が大きいわけだが、九二年版はそういったイメージを「歴史の真実と異なる」と断言しているのである。一読して分かる通り、曹操の悪役イメージは影も形もなく、贅辞で埋め尽くされている。また、Bの部分では、曹操の肖像画を掲載し²⁾、また、彼の作である楽府の一節「老驥伏櫪，志在千里。烈士暮年，壯心不已」³⁾を引用する。同詩について、教師用教本⁴⁾の「資料と注釈」は「統一の大業において努力奮闘し、積極的に進取する精神を表現したもの」と解説している。

楷書部分、つまり必修でない部分であるCは、曹操が大きく勢力を拡大する契機となった、官渡の戦いの記述である。記述の文体や表現に対し、歴史教科書の記述としては物語性が強いという印象を受けるかもしれないが、これは『三国志』魏書一・武帝本紀本文および同注『曹瞞伝』にほぼ即した内容となっており、原典史料に忠実な教科書記述と評して良い。またLでは、曹操が誤って麦畑を踏み荒らした自分を罰しようとした逸話を引用している。CもLも、曹操を肯定的に評価するためのものであることは明らかである。とくに面白いのはLで、『三国志』魏書一・武帝紀裴注『曹瞞伝』を典拠とするが、『曹瞞伝』がこの逸話を採録した意図は、曹操を残酷で偽りに満ちた人物だと断ずるためであった⁵⁾。だが、九二年版教科書は、むしろこれを「法の遵守を尊ぶ曹操の態度」という肯定評価の記述として採用しているのである。

以上のような九二年版の記述からは、曹操に対して全面的な肯定評価を下そうという意図が看取できることを確認しておく。

ところで、本稿で何度か触れている通り、二十二課において引用・紹介される歴史故事のほとんどは、『三国志』を典拠とする。だが、Bに見える「老驥伏櫪……」の一節は『三国志』に一切記載がない。この楽府は「歩出

夏門行」あるいは「碣石篇」と呼ばれる曹操の作品で、古くは『宋書』巻二十一・楽志三に見える⁶⁾。なぜ教科書は、この『三国志』に全く見えない同作品をわざわざ引張ってきたのであろうか。そこには、毛沢東の曹操評価が影響を及ぼしている。

昨今の中国において曹操が肯定的に評価されている理由の多くは、毛沢東に求められる。彼は中華人民共和国を建国後、積極的に曹操の再評価に取り組んだ。たとえば一九五八年、彼は「今、曹操の名誉回復は必須である。我々中国共産党は、真理を重んずる党である。凡そ誤謬と呼べるものは、例え十年、二十年、いや千年、二千年かかろうとも正さねばならない。(中略)曹操を奸雄だと評するのは封建正統論が生み出した冤罪である。これは覆さねばならない」と語っている⁷⁾。建国後の毛沢東は、曹操を悪人とする見解が広く普及していたことを踏まえ、かかる「曹操=悪」という図式が従来の「封建的な」統治体制が生み出した誤った価値観であると論じ、その曹操を高く評価した。そこには、旧体制の否定という意図が込められている。

この毛沢東は、曹操の「碣石篇」を好んでいたようで、療養中の林彪に同詩を書いて贈って健康を心がけるよう注意を促したり、自ら曹操が同作品を詠じた碣石の地において、同作品を意識した詩「浪淘沙・北戴河」を詠じている⁸⁾。もちろん、酒を飲むたびに「老驥伏櫪……」と詠じた東晋の王敦の例があるように(『晋書』巻九十八・王敦伝)、同楽府と曹操を結びつけたのは毛沢東だけではない、しかし、九二年版の記載の、Aにおける曹操再評価の必要性の主張、Dに見える曹操の「政治家、軍事家そして詩人」という三要素が毛沢東による曹操評価そのままであること⁹⁾、そして全体を貫く曹操に対する全面的な賛辞を併せ考えると、教科書の曹操評価が毛沢東による曹操評価を踏まえていることが見て取れる。

附言するならば、二十七課(文化史の単元)には、女流詩人として蔡文姬が挙げられている。蔡文姬は、後漢末の人士・蔡邕の娘で、戦乱のなか匈奴にさらわれたが、曹操によって帰還できたという経歴を持つ人物で、九二年版でも、比較的古い時代の記述に登場する数少ない女性の一人である。この蔡文姬については、郭沫若が一九五九年に「談蔡文姬の胡笳十八拍」を発表し、また歴史劇『蔡文姬』を編んでいるが、彼はその目的を「曹操の名誉回復にある」と断言している。このように郭沫若は、学術方面でも文芸方面でも蔡文姬評価を通じて曹操称賛を行っているが、それは毛沢東の意向を受け

て行ったという性格が強い¹⁰⁾。

そして、中国共産党の歴史観を示すキーワードとして有名なのが、Cに見える「起義」の語である。「黄巾起義」に該当する日本語は通常、「黄巾の乱」であろう。しかし、マルクス主義に基づいた歴史学を標榜する中国共産党では、階級闘争が歴史の発展を促すという史観を持つため、農民蜂起は「乱」でなく、「起義（義のために兵を挙げる）」と表現し、高く評価する。黄巾についての記述は十五課に集中しており、その記述を要約すると、「政治は腐敗し、多くの農民は衣食を失い、一家全員が死ぬこともあった。彼らは次々と闘争を始めた。太平道の首領・張角は、農民数十万を指導して起義を発動したが、後漢政府は地主と連合し、起義軍を鎮圧した。黄巾軍は、九ヶ月の英勇なる戦闘を経て、最終的に失敗した」となっている。「起義」に対する高い位置づけが読み取れるが、史書『三国志』には、教科書が絶賛する曹操がこの黄巾を討伐したことが明記されており、曹操評価と黄巾評価の両立は容易ではない。官渡戦や赤壁戦を比較的詳細に描く教科書が、「黄巾起義」を簡潔に描写する所以である。余談であるが、この特徴はテレビドラマ『三国演義』¹¹⁾でも同様で、「黄巾起義」と劉備や曹操が直接戦うシーンは無い。

(四) 三顧の礼から赤壁大戦まで

E・F・G・Hでは、主人公が曹操から諸葛亮にうつり、三顧の礼と赤壁の戦いが述べられる。官渡の戦いの描写同様、楷書部分が物語的な文章となっているが、これもほぼ史書の記述に沿ったものである（Fは『三国志』蜀書五・諸葛亮伝、Hは同呉書九・周瑜伝）。比較的客観的で史料に忠実な記述と捉えて良いと思われる。

(五) 三国の統治

九二年版の記述は、Iにて三国鼎立の状況が成立したことを概説し、J以降では、三国それぞれの統治についての簡潔な説明へと移る。J・Kに見える発明家・馬鈞の評価が目を引くが、これについては並木頼寿の理解が参考となる。並木は、『教学大綱』（修訂本）¹²⁾に「中国は長く世界の先端に位置し、人類に大きな貢献をしてきたことを、強調・教育し、愛国主義を宣揚する」という目的が明記してあることに触れ、「中国の歴史のうえで、先進

的な文化的達成や科学技術の進歩、発明などについて、西洋での同種のものの出現と比較しながら、中国の歴史に現れたものの時期の早さや、内容、程度の高さなどを指摘する記述がおびただしくみられる」と指摘する。馬鈞の発明「翻車」に関する詳述と高い評価は、この一例と捉えることが可能である。

M～Pは、蜀漢と諸葛亮への高い評価が読み取れる段で、今までと同様、基本的には史書『三国志』の記載に基づいている。目を引くのはOの記事で、諸葛亮に七回捕らえられ七回釈放された孟獲を「少数民族」と明記し、今でも少数民族が「諸葛錦」という呼称を用いていると記す。これは、共産党政府による少数民族政策の一環であろう。教師用教本では同部分について「この政策の結果、漢族と西南地区の少数民族の間のつながりが強化された」と明記してある。なお、山口久和《一九九九》は、一九九二年に雲南省曲靖市を訪れた際、同地にあったレリーフが、孟獲と彼の配下の少数民族の勇猛ぶりを堂々と描き出している理由について、現地の役人から、「これは少数民族に対する配慮です。市当局の方針です」と回答された、と述懐している。

そして、第二十二課の最後を飾る孫呉に関する記述であるが、これに該当するQ・Rは、同課で最も政治色の濃厚な部分と言って良い。その論点は、夷洲に関する記述に集約される。教科書の記述では、夷洲が現在の台湾であることを注釈で明記し、内地つまり中国大陆と台湾が三世紀のいにしえから交流を持っていたことを、楷書部分ではなく本文部分、つまり必修箇所において強調している。教師用教本でも同部分におけるポイントは「昔から台湾は中国の不可分の一部分であることを強調」することだ、と明記してある。

では、この衛温の夷洲行きについて、『三国志』はどう記しているか、見てみよう。

〔黄龍〕二年（西暦二三〇年）春正月，（中略）遣將軍衛温・諸葛直將甲士万人浮海求夷洲及亶洲。亶洲在海中，長老伝言「秦始皇帝遣方士徐福將童男童女数千人入海，求蓬萊神山及仙藥，止此洲不還。世相承有数万家，其上人民，時有至会稽貨布，会稽東吳人海行，亦有遭風流移至亶洲者」。所在絶遠，卒不可得至，但得夷洲数千人還。三年春二月，（中略）衛温・諸葛直皆以違詔無功，下獄，誅。（『三国志』呉書二・呉主

(孫権) 伝

要約すると、以下のようになる。「孫権は、衛温と諸葛直に、兵士一万人を率いて船出させ、夷洲と亶洲を探させた。長老の言う伝説では、『亶洲とは秦の始皇帝の命令で仙薬を探しに出た徐福が、留まって帰ってこなかった場所である』という。絶遠の地にあり、けっきょく衛温らはそこに到着できず、ただ夷洲から数千人を連れ帰って帰還しただけであった。翌年二月、衛温と諸葛直は、功績をあげられなかったかどで処刑された。」

孫権が夷洲・亶洲を探索させた理由や、そもそも夷洲・亶洲が現在のどこに該当するのかについては、古来諸説あるが¹³⁾、上述の『三国志』の記事のうち、教科書は一部分しか採録していないことが分かる。衛温が夷洲から数千人を連れてきたことや、衛温らの哀れな末路などについて、『三国志』は触れているが、教科書は触れない。そして教科書は、「古くから交流があった」という側面を強調する筆致となっていることが見て取れる。

加えて興味深いのは、『三国志』では夷洲と併記されている亶洲に関する記述（しかも夷洲のそれよりも分量が多い）が、教科書には全く見えないことである。亶洲は現在の日本に属するいずれかの地を指す可能性があると考えられているが、それは触れていない。日本との関連では、邪馬臺國に関する記述も無いことも附言しておく。

ただこれは、日本と中国に古くから交流があったという事実を否定したいというわけではない。現に第十八課では、徐福が日本に来たという伝説を紹介したり、後漢が「漢委奴国王」の金印を贈ったという記述がある。だが興味を引くのは、金印を贈られた倭奴国が漢の冊封国になったというニュアンスが一切なく、「交流」であったという表現に徹していることである。これは他の課でも同様で、たとえば唐王朝と周辺地域の冊封や朝貢回賜関係を媒介とした当時の東アジア社会などへの言及も、ほとんどない。その理由は、茨木智志〈二〇〇六〉の「先進的な大国の一員として、国際的に友好的な外交関係を保っていることが基本とされ、外国との関係は交流が第一であり、(中略)そのため中国から外国への歴史上の軍事行動はほとんど記述しない傾向にある」という指摘の通りであろう。

二．三国志の授業風景

それでは、斯かる教科書を用いた授業風景は、いかなるものだったのであろうか。張雲鵬・崔榮《一九九六》（以後「筆録」と表記）を参考に、少し見てみよう。同書「前言」では「各地の中学教育改革の中で大きな成果をあげ、影響の大きい優秀な教師を招聘し、彼らが現在進めている教学改革の実験授業の筆録を作り、同時に学者ら専門家によりその筆録に分析評価を加えた」と記している。同書の再現する授業内容は基本的に教師の講義と生徒との対話であり、そこに「評」が加えられるという形式になっている。この「評」は、当時において理想とされていた教育を知る重要な手がかりと言えよう。この筆録からは、授業の展開が余りに円滑であるという印象を受けるが、これは前掲の「前言」にある通り、実際の授業筆録に編集を加えた結果であろう。どこまで編集が入っているかは不明であるが、その元が実際の授業の記録であることから、教師の意図する歴史の授業と、それに対する生徒の反応を見る上で重要な資料である。この筆録の中から、重要な部分を取り上げ、分析を進めていく。

先生：三国鼎立の局面はいかにして形成されたのでしょうか。皆さんの多くはきっと『三国演義』の小説や連環画、映画やテレビドラマなどを見たことがあるでしょう。『三国演義』の内容に関係する物を言える人はいるかな？

評：生徒達が既に知っている課外知識と新単元の関係をうまく利用して積極性を引き出し、授業への参加を促している。

生徒：『董卓進京』『煮酒論英雄』『三顧茅廬』『官渡之戦』『赤壁之戦』『六出祁山』……。

先生：よろしい、とてもよく知っていますね。これらは皆、文芸作品です。歴史を題材にしていますが歴史とは大きな差異があります。では歴史上、三国時代は一体どのようにして形成されたのでしょうか？

三国時代の人物はどのような活躍をしたのでしょうか？ それこそがこの授業で皆さんにお話する内容です。

評：文学作品と歴史の真実の差異を指摘し、歴史人物の正確な評価への伏線を張っている。

生徒たちが授業以前から三国志についての知識をある程度持っていること

は、ほぼ前提のようである。中国でも、三国志は人気が高いことが窺えよう。

授業の話題はこのあと、黄巾起義を経て、曹操へと移る。

先生：皆さんがよく知っている人物……そう、曹操です。どなたか戯劇で曹操がどのような外見をしているか、挙げてみて下さい。

生徒：真っ白な顔、大きなヒゲ、冷酷、陰險な大奸臣です¹⁴⁾。

先生：(中略)では皆さん教科書を開いて下さい。その中の曹操の肖像画はどんな風でしょうか。見て下さい、眉目秀麗、表情は落ち着いており、叡智に富んだ顔をしています。京劇の形容と何と違うことでしょう！ これは史実と文学作品のイメージの差異から来たものです。我々は歴史の真実を理解してはじめて正確な結論を曹操に与えることが出来るのです。

評：生徒に、京劇での曹操の外見と教科書の肖像を比較させることで、文学作品と史実の差異に触れている。この差異を把握することで、歴史人物に歴史の真実と合致させた評価をする手始めとしている。

教科書が採用する曹操の肖像画が実際の曹操をどれほど反映しているか疑わしいことは、注2で述べた。かかる肖像を「史実」と言い切るのには疑問を覚えるが、逆に言えばこのことは、教師側には、生徒の持つ曹操の悪人イメージを払拭しようという意図が強いことを物語る。授業は続けて、教科書の記述に忠実に曹操の業績を追っているが、そこは省略し、屯田に関する議論を見てみよう。

生徒：曹操軍の兵糧問題の解決の基礎を固めました。屯民は深刻な搾取を受けていたけれど、難民は落ち着いた生活を得ることができ、荒れ地は農地に変わり、生産は回復し、人心を掴みました。

評：生徒達に次々に質問をし、屯田が一方で搾取だったこと、その一方で生産回復の作用を果たし民心を得たということを理解させている。曹操はこうして物質的にも人心的にも北方統一の基礎を固めたのである。

屯田の否定的側面を指摘しつつも、総合的には肯定的に評価するというまとめ方は、一九五九年前後に活発だった議論を反映している。一九五九年前後は曹操再評価の議論が盛んであり、同年の一月から七月末に発表された曹操に関する論文は、何と一三〇余りもあったという¹⁵⁾。この中でも、曹操の実施した屯田に対しては、五〇%（官牛を給された者は税率六〇%）という高い税率だったこともあり、農民からの搾取であるとして否定的に理解する主張も見られたが、議論の口火を切った郭沫若は「屯田政策は曹操と同時に彼ら農民にも大きな利益となった」と主張し、この理解が最も影響力を持った感がある¹⁶⁾。授業の屯田評は、当時の学説の趨勢を強く反映したのとなっていると見て良い。曹操については以下のようにまとめられている。

先生：曹魏については学習を終えました。誰か、曹操への見方を述べて下さい。

生徒：曹操は、一代の傑出した軍事家・政治家・詩人であり、豪族を平らげ、才能ある人物を愛し、厳格な法で軍を統率し、生産を重視し、農業を保護し、間違いなく英雄です。しかし彼は同時に野心家で、陰謀家で、農民起義を鎮圧した死刑執行人で、殺人魔王で、時としても傲慢で狂気じみて……。

先生：そうですね。曹操という人物は多くの矛盾を抱えた人物です。確かに英雄ではありましたが、多くの過ちも犯しました。歴史人物を見る際には、その人物の主な業績を見て、当時の社会に貢献したかどうかを見ねばなりません。（中略）曹操は民心に応えました。この功績は高く評価されるべきです。『三国演義』の作者は正統観念を持っていたので歴史に対し偏見があり、故に曹操を乱世の奸雄と書いたのです。今日の学習を通し、我々は実際の曹操の姿を回復させねばなりません。

評：先に生徒に結論を述べさせ、その上で先生が生徒のまとめを一步進めた分析と評価を与えている。生徒の主体性を重んじ、且つ的確に指導している。曹操への評価は一貫したものを貫き、『演義』における正統観念を指摘して歴史人物への本来あるべき評価を回復させている。こうして歴史的唯物主義の観点を培うのである。

教師側は曹操の功績を高く評価するまとめをしており、これは教科書の記述に準拠したものである。「軍事家・政治家・詩人」という、毛沢東による曹操評が再度見えるのも興味深い。だが生徒の発言には、「曹操の功績は認めるが、やはり余り好きではない」という感情も見取れる。これは、諸葛亮を扱った発言と比較すると更に明らかになる。

先生：諸葛亮とはどんな人物だったのでしょうか。皆さんで討論してみましょう。

生徒：諸葛亮は経済家でした。農業に力を入れ……。

生徒：諸葛亮は民族学者であり、心理学者でした。西南民族との関係を重視し、七擒七縱で孟獲を信服させ…（中略）。

生徒：彼は神仙でした。東南の風を呼びました。

生徒：それは違います。彼は天文地理に精通していたんです。（中略）

先生：そう、気象学者とも言えますね。

評：討論の中での異なる意見が出た場合、時機を見計らって正しい意見を肯定する。

生徒：諸葛亮は音楽家だと思います。琴がひけました。

生徒：琴を弾いたのは、ただフリをただけではないでしょうか。司馬懿を空城計で欺くべく（中略）音楽家とは言えないと思います。

生徒：彼は知謀に長けていて、羽扇と綸巾が格好いいです。

生徒：彼は確かに知謀の士だったけど、所詮三人の皮職人に及ばない¹⁷⁾です。力の及ばない所もあり、晩年は行動を急ぎすぎました。「六出祁山」も失策の一つで……（中略）

先生：とても熱い討論ですね。まとめますと、彼は政治家・軍事家でした。とても予見性があり、（中略）天下統一の志はありましたが、蜀には統一の条件が無く、諸葛亮は形勢を見誤り、その志は報われることなく五丈原において没するという結末を迎えてしまいました。漢王室への「愚忠」に、彼の歴史上に於ける限界を見て取ることができるでしょう。しかし我々は歴史人物に対し余り厳しい見方はできません。当時「忠」は充分理解できるものでした。彼の才知は正に智恵の化身と言うに相応しく、「鞠躬尽瘁，死而後已」¹⁸⁾の精神は時を超えて人民を鼓舞激励してきました。「忠」は現在では当然、まず人民の

為に、です。(中略)

評：諸葛亮への評価を、最後に「鞠躬尽瘁，死而後已」という彼の高尚な精神を以て締め括り、かつ生徒にこの精神を学び、人民の為に奉仕するよう指導している。これも一つ思想教育である。

曹操に対する討論と熱気が違うのは一目瞭然で、「神仙」「音楽家」「格好いい」など、歴史人物としてではなくファンとして諸葛亮を論じている印象がある。やはり両者の人気の差であろう。

なお、呉と夷洲については、以下のようになっている。

先生：二三〇年、孫権は衛温を派遣し、一万人の船隊を率いて夷洲に到達しました。夷洲は今は何といいますか？

生徒：台湾です。

先生：夷洲に到着したあと、教科書は夷洲と内地のつながりが強化される影響を及ぼしたと述べていますが、なぜでしょう？

生徒：以前から往来があったと説明しています。

先生：そうです。地質学者の判断によると、一万年前に大陸は台湾と分かれたそうです。今日、兩岸の考古学者は、台湾の新石器時代の工具・陶器は、大陸の沿海で出土する新石器の工具・陶器と同種の文化に属すると見えています。両漢の時代、大陸から台湾に行った人もいました。今回の衛温が揚州から海を渡って台湾に到達したことは、大陸の人が台湾と大規模なつながりを持った最初の正式な記録です。これよりのち、大陸から台湾に行って定住する人は日増しに増えていき、台湾の人も大陸にやってくる、兩岸の経済・文化のつながりは頻繁・密接となっていったのです。このことはまた、台湾が大陸の不可分の領土であることを証明しています。

評：台湾と大陸の関係を述べることで、考古学の知識を補充する必要がある。さらに一步すすめて、台湾が地理上から見ても大陸の不可分の一部であることを証明する。

「台湾は中華人民共和国の正式な領土」という主張が、より鮮明になっている。考古学的見地の導入や、「兩岸」すなわち大陸の人と台湾の人のいず

れもが同じ見解であると述べていることも、主張を補強しようという意図がよく見えるであろう。

三. 歴史教育の変化について

(一) 二〇〇一年の改訂

九二年版の教科書は、二〇〇一年六月に改訂版が発行された。改訂についてこの新版教科書の巻頭は、「今回の改訂は、一九九二年初版のものを基礎とし、以下の三点を強調した。一. 学生の負担を軽減し、難度を下げる。二. 更に啓発的で生き生きとしたものにする。三. 意識の刷新と実践能力を培う」¹⁹⁾と述べている。全体的に分量が削減され、旧版で全一七六頁だった第一冊は新版では一二二頁となり、課の数は二十七課から二十五課に減っている。旧版で二十二課だった「三国鼎立」は二十課になっており、その内容に目立った改変は無いが、旧版では記述のあった、曹操が麦を踏んだ逸話や諸葛亮と孟獲の七擒七縱の逸話等は省略された。

(二) 『歴史与社会』へ

かかる歴史観の変化は、さらに大きな形で具現化する。中国では、一九九〇～二〇〇〇年代からはじまった教育改革により、人民教育出版社による歴史教科書しか選択肢がないというシステムは変わりつつある。中学校一～三年に『歴史与社会（歴史と社会）』という課目が新設され、(従来どおりの「歴史」「地理」の教科を選択することも可能)、この「歴史と社会」の教科書は、人民教育出版社以外からも出されている。ただし人民教育出版社の影響力は依然強く、同社刊行のもの採択率は、二〇〇六年の段階で八八%を超えという。(以上、茨木智志〈二〇〇六〉、並木頼寿監訳《二〇〇九》、および同書に収録された山王昌代の解説による)

歴史教育に関する大きな変更点としては、分量が大幅に減ったこと、「起義」史観が大幅に薄まったことが挙げられる。本論のテーマである三国時代に関する記述も、全体的に非常に簡潔なものとなった。「黄巾」の単語すら無くなったところに、「起義」による階級闘争を重視する歴史観を強調しないという姿勢が読み取れよう。ただし、かかる史観の転換は、中国における歴史教育が政権の意向を受けなくなったことを意味しない。「起義」史観を薄めた背景には、農民蜂起をいつまでも「起義」と評価していれば、現政権

に対する反抗運動すら「起義」という大義名分を持ってしまいかねないという、中国共産党の抱える現実的な懊悩があると言われている。また、「歴史と社会」の教科書にも、夷洲についての記事が従来とほぼ同じ内容で残っていることは、歴史教育の持つ政治性が健在であることを雄弁に物語る。

おわりに

「すべての歴史は現代史である」と語ったのは、イタリアの学者クローチェであった（『歴史叙述の理論と歴史』）。見る人の持つ価値観や問題関心、文化的背景などの様々な要素によって、過去の出来事の見方は変わってくる。ゆえに、歴史に関する叙述というものは、叙述者の思想・境遇や、その生きた時代を反映せずにはおられない。「正しい歴史認識」を持つことは大変に難しいのであり、そもそも「正しい」歴史認識というものが存在するのかという疑問すら沸いてしまうのは、無理もないことであろう。

だが、だからといって、歴史を学ぶこと自体を放棄してしまうのは、生産的ではない。様々な歴史意識が存在するのは、ある意味当然なのである。まず重要なのは、「お互いの持つ歴史的知識や歴史観が、どこまでが一緒で、どこが違うのか」に関する理解を深めることであろう。多様な価値観が存在することを知らずして、相互理解と異文化交流の第一歩である。歴史教科書の記述は、そんな当たり前のことを再確認させてくれる貴重な材料と言えよう。

現代中国における歴史人物評価は過渡期にある。二〇〇二年末には、中国教育部が歴史教育で岳飛や文天祥を民族英雄として扱わない方針を示したという報道があった²⁰⁾。少数民族問題に対する配慮と見方が一般的だが、これには強烈な反論も多い。中でも興味深いのは、「このロジックからすると、諸葛亮は祖国統一を妨げた主犯ということになる」という諷刺が見られたことである²¹⁾。三国をはじめとする歴史に関する言説が、単なる昔話ではなく、現代中国の社会や世相を色濃く反映したものであることが、よくわかる。

このような現代中国の歴史観を知ることは、今後の日中関係をより良いものとするために、必須である。本稿は、日中ともに知名度のある三国時代を切り口として教科書の記述を紹介することにより、斯かる希望に資することを切に願うものである。

注

- 1) 本論では、紙幅の都合上、教科書の記述紹介は邦訳にとどめる。邦訳は基本的に筆者によるが、小島晋治・並木頼寿監訳《二〇〇一》を参照した。なお、筆者は同書の該当部分の翻訳作業に従事したことも付記しておく。
- 2) 教科書が採用する曹操の肖像画は、明代に編まれた『三才図会』のもの。おそらく曹操を描いた絵として最も有名であるが、曹操の肖像に限らず、同書の人物図像が信用のおけないものであることは『四庫全書総目』も指摘する通りであり（『四庫全書総目』巻百三十八・子部四十八『三才図会』）、実際の曹操を反映したものとは言い難い。ただし、これは曹操に限ったことではないが、中国史の歴史人物の多くは、信憑性のおける肖像画が現存しないため、『三才図会』などを用いるのは、教科書としてもやむを得ずの措置なのであろう。
- 3) 「歩出夏門行」図解「神亀雖寿」の一部。「神亀雖寿」は国語の教科書にも全文掲載される（『九年義務教育三年制初級中学教科書 語文』人民教育出版社、2000年、第二冊）など、教育界において「神亀雖寿」が曹操の志を表す詩として重視されていることが窺える。
- 4) 人民教育出版社歴史室編『九年義務教育三年制初級中学 中国歴史第一冊教師教學用書』人民教育出版社、一九九八年。
- 5) 『曹瞞伝』は曹操のことを否定的に伝える逸話を多く収録した書というが、現存しない。『三国志』巻一・武帝本紀の裴松之注に「呉人作『曹瞞伝』及郭頌『世語』並云……」とあり、曹操に対し否定的な理由は、著者が呉の人であったことに求める見解が一般的である。なお同書は『隋書』経籍志には見えず、『旧唐書』巻四十六・経籍志上に「曹瞞伝一卷 呉人作」とある。
- 6) ちなみに『宋書』では「老驥伏櫪」の部分が「驥老伏櫪」となっている。
- 7) 陶魯筋《一九九三》。
- 8) ちなみに、「浪淘沙・北戴河」は、テレビドラマ『開国領袖毛沢東』（中央電視台二〇〇〇年、楊光遠監督、唐国强主演）のエンディング主題歌の歌詞としてそのまま使用されている。同作品が毛沢東の代表作の一つとして知名度を持っていることが分かる。
- 9) 一九五四年夏、毛沢東は主治医に対して語った言葉の中で、曹操を「傑出した軍事家・詩人・政治家だった」と定義し、その再評価の必要性を語っている。権延赤《一九八九》。

- 10) 毛沢東は、一九五七年十一月のモスクワ訪問中、郭沫若らに曹操再評価の必要性を訴えている。それまでは曹操を否定的に論じたことのある郭沫若であったが、この二年後、毛沢東の曹操評価の動きを支える形で、前掲の一連の作品を発表している。
- 11) 中央電視台作品。1994年10月23日放映開始（易凱「一部三国史 幾多英雄泪」『人民日報』1994年10月22日による）、全84話。
- 12) 中華人民共和国国家教育委員会制訂『全日制中学歴史教学大綱』（修訂本）人民教育出版社、一九九一年）のこと。
- 13) 有名なものは、労働力確保を目的としていたというものである。これに対し渡邊義浩〈二〇一三〉は、かかる船団派遣が孫権の皇帝即位後であることに着目し、呉を「中華」とした華夷秩序の構成を目指したものと説く。
- 14) ここに見える曹操描写は、京劇における曹操のメイクである。京劇における真っ白な顔は、悪人の象徴となっている。
- 15) 『曹操論集』（三聯書店編輯部編、生活・読書・新知三聯書店出版、一九六〇年）の冒頭にある「編者的話」による。
- 16) 屯田をめぐる当時の一連の議論については、郭沫若〈一九五九-b〉、および同論を含めた数多くの学者の論を収録した『曹操論集』（前掲）を参照。
- 17) 中国の諺「三個臭皮匠塞過諸葛亮」。「三人寄れば文殊の知恵」の意味。
- 18) 諸葛亮「出師表」の一部。『三国志』蜀書五・諸葛亮伝に全文が見える。『三国志』では元々「鞠躬尽力」となっているが、現在は「尽瘁」のほうが広く用いられる。
- 19) 人民教育出版社歴史室編著『九年義務教育三年制初級中学教科書 中国歴史』人民教育出版社出版、二〇〇一年初版、第一冊、巻頭「説明」より要約。
- 20) 「南宋の武将・岳飛への評価、再定義せず 教育部」『人民網日本語版』2002年12月7日 http://j.people.ne.jp/2002/12/10/jp20021210_24143.html（二〇〇三年十月二十五日閲覧）ほか。
- 21) 「网友指中国教育部删除网页推脱责任」『大紀元』（香港）ホームページ、二〇〇二年十二月十一日、<http://dajiyuan.com/b5/2/12/11/n254504.htm>（二〇〇三年十月二十五日閲覧）。

主要参考文献（著者名を日本語読みで五十音順に配列）

茨木智志〈二〇〇六〉「歴史教科書にみる日中の相互認識」劉傑・三谷博・楊大慶『国

- 境を越える歴史認識——日中対話の試み』東京大学出版会，二〇〇六年所収。
- 郭沫若〈一九五九-a〉「談蔡文姬的胡笳十八拍」『光明日報』一九五九年一月七日掲載。
- 郭沫若〈一九五九-b〉「為曹操翻案」『人民日報』一九五九年三月二十三日掲載。
- 郭沫若編著《一九五九-c》『蔡文姬』文物出版社出版。
- 權延赤《一九八九》『紅牆内外』昆侖出版社。
- 小島晋治・並木頼寿監訳《二〇〇一》『世界の歴史シリーズ5 入門 中国の歴史 中国中学校歴史教科書』明石書店。
- 三聯書店編輯部編《一九六〇》『曹操論集』生活・読書・新知三聯書店出版。
- 人民教育出版社歴史室編『九年義務教育三年制初級中学教科書 中国歴史』人民教育出版社，全四冊，一九九二年初版。
- 人民教育出版社歴史室編『九年義務教育三年制初級中学 中国歴史第一冊教師教学用書』人民教育出版社，一九九八年。
- 人民教育出版社歴史室編著『九年義務教育三年制初級中学教科書 中国歴史』人民教育出版社出版，二〇〇一年初版。
- 人民教育出版社・課程教材研究所・綜合文科課程教材研究開発中心『歴史与社会 我們伝承的文明』八年級上冊，人民教育出版社，二〇〇五年。
- 張雲鵬・崔榮主編《一九九六》『歴史教学筆録精選』大連出版社。
- 陶魯笏《一九九三》『一個省委書記回憶毛主席』山西人民出版社。
- 並木頼寿監訳《二〇〇九》『世界の教科書シリーズ26 中国の歴史と社会 中国中学校新設歴史教科書』明石書店。
- 山口久和《一九九九》『「三国志」の迷宮 儒教への反抗 有徳の仮面』文藝春秋。
- 渡邊義浩〈二〇一三〉「孫呉の国際秩序と賣洲」『三国志研究』三国志学会。